『主が…渡された』（ダニエル書 1 章 1-7 節)① 2021.9.5.

＜はじめに＞ 今日からダニエル書を読み進めて行きます。始まりに当たって、本書の概要をまとめた動画を紹介します。(他の聖書各書の動画もあります)

聖書プロジェクト「ダニエル書 概観」 https://www.youtube.com/watch?v=4NhD0vZ9yPc

Ⅰ ダニエル書の背景

①旧約聖書の大きな流れ

聖書は歴史叙述を基本としています。イスラエル民族の始まり、出エジプトとカナン移住、王国の誕生と分裂、滅亡と捕囚、そして帰還が大きな流れです。その流れは大きく二つ、創世記～Ⅱ列王、Ⅰ歴代～ネヘミヤが並走しています。

②3度の捕囚

新バビロン帝国の興隆と侵攻の前に、ユダ王国は圧迫を受け、人民と財宝が奪われる捕囚が起こります。初回(BC605)にはダニエルら、2 回目(BC597)にはエゼキエルも含まれていました。エレミヤはエルサレム陥落(BC586)、3 回目の捕囚も見送っています。

③預言者ダニエル

ダニエルがバビロンに 10 代半ばで来て、宮廷で歴代の王に仕え、晩年にイスラエルの帰還を見届けます。彼はたびたび神からの夢と幻に触れ、これを解き明かし、バビロン以降の諸国の興亡と、そのすべてを導き支配される神の偉大な計画を本書に書き記しました。

Ⅱ 大波に呑み込まれながら

①エホヤキム第 3 年に(1-7、Ⅱ列王 23:31-24:7、Ⅱ歴代 36：5-8)

ユダ王国の末期は、エジプト・新バビロニアの二大国の覇権争いの間で揺れていました。BC605 カルケミシュの戦いで新バビロニアがエジプトを破り、ユダ王国は存続のために神の宮の貴重な器や王族・貴族を差し出し、恭順を示しました。

②敗者の神、主は(2、17)

古代国家の戦争は神々の戦、勝利する神こそ偉大です。ユダ王国は破れ、神の宮の金銀の器、国の将来を託す若い貴人が奪われました。聖書はその記述の主語を「主」「神」としています。なぜでしょうか。

③国々は手桶の一滴(イザヤ 40:15-17,23)

後の歴史から、主が約束された回復と帰還まで、器類も人々も保つためであったとわかります(エズラ 1:7-11)。イスラエルは負けて屈服しましたが、神が負けたのでも滅んだのでもありません。神なる主はなおも主権を持ち、敵国の王さえ用いて事を進められます。

Ⅲ 荒波の中を生きる

①神不在の地で

ダニエル書の舞台は異国・異教の地です。捕虜、寄留民としてそこに長く生活すると、順化・同化するのが常道です。しかし、イスラエルは民族と信仰のいのちを保ち続けました。今、私たちはふるいにかけられているのかもしれません(ルカ 22:31-32)。

②抑圧された中で

かつてのように共に集まることが、今は難しくなっています。この状況が解消することを願いましたが、長期化しそうな様相です。しかし、これは前代未聞の出来事ではなく、歴史の中で繰り返され、その中でもしたたかに生き、主を仰ぎ続けた聖徒たちがいました。

③なおも神は働かれる

神が表舞台に見えないからと失望してはなりません。神は負けたのではありません。諸国と諸王、諸々の権威・権力を手中に治め、ご自身の御心の実現のための道具として用いられます。今を生きる私とこの時代にも、この主なる神は同じだと信じ、期待しますか。

＜おわりに＞ これからしばらくの間、ダニエル書を味わっていきます。この書を通して、この荒波の中で主を仰ぎ見ながら生きる人々と、力強く働かれる主なる神に、そして国々を越え、時代を越えてすべてを治め導かれる神に注目しましょう。今も主は生きておられます。(H.M.)